



田んぼわらしの ささやき

田んぼ 10年だより

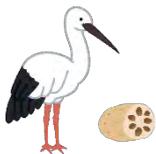
第20号 2020年12月25日発行

田んぼの生物多様性向上10年(略称:田んぼ10年)ニュースレター
 発行: NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ) 水田部会
 所在地: 〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F
 TEL/FAX: 03-3834-6566 電子メール: info@ramnet-j.org
 ホームページ: http://www.ramnet-j.org

目次

田んぼ10年プロジェクト地域交流会 in 徳島(小松島市) 金井 裕.....	1
熊本県八代市での多面的機能支払い交付金についての勉強会報告 古谷愛子.....	2
北海道ヒアリング調査報告 後藤尚味.....	2~3
稲葉光國先生を悼む 呉地正行	3~4
水田部会からのお知らせ(新活動計画キックオフの延期 高橋 久)	4

* * * * *



第11回田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト地域交流会 IN 徳島(小松島市) -生きものと作る稲と地域-を開催

金井 裕

2020年10月4日に、徳島県小松島市の小松島市総合福祉センターにおいて表記の田んぼ10年プロジェクト地域交流会を四国地域で初めて開催しました。今回は、新型コロナウイルス感染症対応として、ZOOM会議システムを用いてオンライン形式の交流会としました。オンラインが50名、現地会場に20名の合計70名の方々に参加いただきました。オンラインとしたことによって、東京や石川、北海道などからも参加いただき、全国に発信することもできました。

開催地の小松島市では、10年前に小松島市生物多様性農法推進協議会を設置し、有機農法を基礎とした生きもののかかした農業を進め、近年はナベヅルやコウノトリも飛来するようになりました。また、徳島県内の鳴門市で野生復帰のコウノトリの営巣があり、ナベヅルは四国の広い地域に飛来しています。そこで、ツルたちやコウノトリの保全活動を軸に、生きものと農業とのかわり、生物多様性農法の進展について考えることにしました。

4日の午前中の「第1部 田んぼめぐり」は、事前に収録した、JA東とくしまで生物多様性方法を進める西田聖参与のインタビュー、太田川土地改良区のナベヅルの保全活動の井原英則理事長による紹介、鳴門市のコウノトリの生息地の柴折史昭NPO法人とくしまコウノトリ基金理事による生息地の案内を配信しました。

午後の「第2部 地域交流会」では、基調報告として呉地正行ラムサール・ネットワーク日本理事による「田んぼの10年プ

ロジェクトの歩みとこれから」、鮫田晋いすみ市農林課 主査による「いすみ市の学校給食有機米100%の取組」、金井裕日本ツル・コウノトリネットワーク 会長による「ツルたちやコウノトリの暮らす田んぼとは」があり、田んぼ10年プロジェクトの目指すこと、学校給食への有機米採択は農家への社会的な意義があるが生きもののかかわりに踏み込むには工夫が必要なこと、ツルとコウノトリが生息するための必要なことが報告されました。

地域からの報告では3名の方から4題の報告がありました。中村隆宏日本有機農業普及協会講師による「小松島市の生物多様性農業の取り組み 稲作の実際」と「小松島市の水田の生きもの」では、小松島市の有機稲作の進展において生産物販売へのコープ自然派の果たした役割が大きかったこと、有機稲作を突き詰めて行くと必ずしも生きもの生息条件にプラスではなくなり、補完が必要な場合があることが報告されました。

柴折史昭 NPO 法人とくしまコウノトリ基金 理事からの「コウノトリの定着・繁殖のための餌環境の創出」と源琢哉(西予市生活福祉部 環境衛生課)氏からの「愛媛県西予市のツル・コウノトリの飛来状況やねぐらなどの保全活動について」では、農家や市民による協力や生息環境整備の報告がありました。

最後のディスカッションではコメンテーターの稲葉光國民間稲作研究所理事長から生物多様性農法の定着に必要な技術や考え方が提示され、報告者間で議論が行われました。



ハス田のコウノトリ



地域交流会の会場



撮影風景(太田川土地改良区)



農業・農村には、生きものの命を育む、美しい景観を作る、洪水を防ぐ、地下水を涵養する、気候を緩和するなど、農作物の生産だけでなく、多面的機能があります。だからこそ、日本の農業は農家だけでなく国民総出で守るべき産業と言えます。そのための国の制度のひとつが、2014年に制定された「農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律」に基づいて作られた日本型直接支払制度の多面的機能支払交付金です。

私たちオリザネットは、多面的機能支払交付金の前身である農地・水・環境保全向上対策事業が始まった2007年から、生態系保全活動のアドバイザーとして、栃木県をはじめとした各地の活動組織の皆さんと、田んぼまわりの生きもの調査や、生きものを増やす活動に取り組んできました。今回は、12月5日八代市で開催されたラムネット主催の勉強会で「多面的機能支払制度を活用した生物多様性向上の取り組みについて」と題し、各地の生態系保全活動の取り組みの様子をご紹介します。

多面的機能支払交付金は、全国の農地の約45%で活用され、総予算は、毎年約1千億円。農業者を中心に組織された全国の活動組織数は、2万以上です。この予算は、生きもの調査、ビオトープ作り、生きもの生息しやすい水路作り、魚道の設置等の生態系保全活動の材料費、調査費、日当などにも使え、全活動組織の3割ほどが生態系保全活動に取り組んでいます。

栃木県や滋賀県では生態系保全活動を全組織に義務付けており、新潟県や兵庫県、宮城県などの活動組織も、生きもの調査が盛んです。生きもの調査の活動は、農家と、地域の子どもたちを含めた非農家が、気軽に楽しく取組め、農家、非農家ともに、農業が持つ生物多様性保全機能を実感できる良い活動です。もっとたくさんの組織に取り組んでほしいと思っています。生きもの調査で地域の生きもの様子が分かってくると、生きもの

を増やす活動にも取組を広げてほしいと願っています。

(おもに栃木県内で行われている生態系保全活動の様子や、取組んだ人たちの感想等を紹介しました。)

この制度では、生態系保全活動が取り込まれる一方で、施設の長寿命化を図るためとして、素掘り水路のコンクリート化が行われています。国の活動の手引きには、整備の際は地域の生態系に配慮するようとの注意事項があるものの、大部分は配慮の検討すらされておらず、田んぼまわりの生物多様性は、非常に多くの影響を受けています。

(そのような現状の中でも、組織内で話し合いを行い環境配慮型の水路整備に取り組んだ事例をいくつかご紹介しました。)会場から、多面的機能支払交付金を活用して、カモ類によるキャベツやレタスなど冬作野菜の食害対策を何とかできないかとの質問がありました。球磨川河口の干拓地は、多様な水鳥の生息する豊かな八代海に面しているため、カモ類も多く、イ草の田んぼやブロッコリーなどの野菜畑にはテグス糸や、ネット張りなどの対策が、各所に見られます。

鳥獣害対策は、多面的機能支払交付金の支払い対象活動になっています。活動組織として地域全体の活動と位置付けることで取り組めるはず。現地調査を行い、どのような対策を行えばよいかを検討し、地域全体で対策を行うことが効果的な対策につながると思います。野鳥愛好会など、野鳥の生態に詳しい方々に協力してもらい、ともに検討する場を、作ってみるのはいかがでしょうかと提案しました。



北海道ヒアリング調査報告

雪が降り始める前のギリギリの11月9日～11日、北海道を訪問し、(株)アレフのえこりん村、宮島沼水鳥・湿地センター、篠津中央土地改良区、舞鶴遊水地、勇払原野の5カ所をヒアリングしました。

■株式会社アレフ えこりん村

えこりん村は、「食は人を良くする」を体現したもので、通常は4月末～10月31日まで開園している。今年は特別に6月4日から開園となった。園内で収穫されたお米「ななつぼし」は、主にイベントで使用し、黒米「きたのむらさき」は、販売と園内レストランで使用している。生き物調査は、イトミミズやカエルなどは定期的に実施し、水生昆虫は年に2回ほど調査している。北

海道では外来種のトノサマガエルは、捕獲して餌に役立ててもらっている。

びっくりドンキーのお米の直営産地の生産者では、2016年から生き物調査が義務づけられている。田んぼの生き物調査を通じて自分の田んぼの状態を見直すきっかけに利用してもらっており、魚道などの生き物に配慮した活動につながっている。フ

後藤尚味



ランチャイズ産地についても、講習会を開始し、2023 年までに全産地での実地を目指しているという。

(ヒアリング：株式会社アレフ 荒木洋美)

■ 宮島沼水鳥・湿地センター

訪問した時期が丁度、2020 年～2024 年の 5 カ年計画の最初の年に当たり、宮島沼に流入してくる農業用水を石狩川へ流す付け替え工事が行なわれていました。これにより、農業排水が宮島沼に入らなくなるため、湖水の富栄養化と水深が浅くなる現象が改善されることが期待されています。

マガンの主な餌は、田んぼの落ち粃ですが、秋に田んぼを漑き込んでしまうと食べ物が無くなり、小麦畑に行ってしまいます。そこで、米の収穫後の秋の田んぼに麦を撒いて育て、翌春にマガンに食べてもらう採食地「はるむぎたんぼ」を整備しました。マガンを追い払う地区と、歓迎する地区とを分けて対策をとることが有効であることが分りました。

例年は、宮島沼水鳥・湿地センターでは、宮島沼周辺の農家と一緒に作った米を販売するのですが、2020 年はこのような整備が行なわれたため米作りができず、センター受付のお米販売コーナーは、残念ながら空でした。

(ヒアリング：宮島沼水鳥・湿地センター 牛島克巳)

■ 篠津中央土地改良区「泥炭資料館」



厚さ 7~5m の泥炭層が 55,000ha もある広大な石狩泥炭地を、農地に開拓した歴史と技術がぎっしり詰まった資料館でした。(ヒアリング：篠津中央土地改良区 坂本克史)



稲葉光國さん。ありがとうございました。

12 月 11 日、大変悲しい知らせが届きました。民間稲作研究所所長で、ラムサール・ネットワーク日本の理事の、稲葉光國さんが亡くなりました。

2020 年 1 月に末期の肺がんと診断されましたが、放射線治療の結果病状が回復し、それまで以上に精力的に活動していました。10 月 4 日には、小松島市で開催された、第 11 回田んぼ 10 年地域交流会に Zoom で参加し、画面越しに普段と変わらない的確なコメントを頂きましたが、その姿からは病気の気配は全く感じられませんでした。また 10 月末までは農場でコンバインに乗りソバの刈り取りを行いとても元気そうでしたが、その後急に体調が悪化し、自宅療養を続けていましたが、ついには帰らぬ人となってしまいました。

■ 舞鶴遊水地

道東で繁殖したタンチョウの生息地拡大を目的に、2014 年に 14 名の農家により「舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会」が発足し、200ha の農地をタンチョウが食べてもよい場所として提供した。2016 年から 2020 年までの 5 カ年の国土交通省の社会実験という位置づけで行政やコンサル等による「タンチョウも住めるまちづくり検討協議会」が立ち上がった。

2017 年から舞鶴遊水地（長沼町）にタンチョウが訪れるようになり、2020 年春に待望の繁殖が確認され、2 羽生まれた雛のうち、1 羽が無事に育ち巣立っていった。

地元では、タンチョウのソフトクリームや、タンチョウのロゴマーク入りの食パンなどの商品も発売された。

残念ながら、今回訪問した観察小屋は、社会実験の終了（2021 年 3 月）と共に閉鎖となる予定。人口 1 万人規模の長沼町の財政状況で維持するのは厳しいとのことだった。

(ヒアリング：長沼町政策推進課 平林毅一郎、舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会 加藤幸一・菊澤巧)



■ 勇払原野

ラムサール条約湿地を目指している勇払原野は、野生の鹿が沢山走り回っていました。春には豪州からオオジギが渡って来ます。

(ガイド：ウトナイ湖サンクチュアリ 中村 聡)



呉地正行

稲葉さんとの出会いは覚えていませんが、共に活動する契機は、民間稲作研究所が主催し、2006 年 7 月に韓国で開催された第 7 回「日・韓・中」稲作技術会議でした。

この会議には、初めて農業関係者以外に環境保護団体が参加し、ラムサール条約と水田についての基調講演や田んぼの生



きもの調査も行われ、その後の環境創造型農業と田んぼの生物多様性をセットにした取り組みの起点となりました。その後稲葉さんとは、水田農業と生物多様性向上について、様々な場で議論を重ね、それを通じて、ラムサール条約や生物多様性条約での水田決議の採択や、ICEBA（生物の多様性を育む農業）国際会議なども共催してきました。農業と環境の共存という難しい課題に対して様々なレベルで成果を上げることができた

のは、深い見識と未来を見すえた理念を持った稲葉さんがいらしたからです。

稲葉さんの温厚で誰とでも分け隔てなく接する人柄は、多くの人を惹きつける力をもっていました。これは水田の雑草に対しても同じで、『決して、「除草」という言葉を使わず、「抑草」という言葉を用いていました。そういうところにも優しさがありました。』という勇美子夫人のお通夜での言葉にも表れています。ご冥福をお祈りします。



水田部会からのお知らせ



■新活動計画キックオフの延期 高橋 久

昨年12月に東京で行った田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト全国集会において、2021年1月頃に新しいプロジェクトを立ち上げるためのキックオフ集会を開催する旨を予告しました。今年ラムネットJでは新計画策定部会を設置し、オンライン会議による部会を7回開催し検討を重ねてきました。また11月15日には、関係団体のヒアリングを兼ねたzoomによるワークショップを実施しました。その中で、より広汎な参加のもとに次のプロジェクトを実施するためには、実施主体をこれまでの枠組み以上に拡大すること、長期を見通した財源の確保が必要であるということが指摘されました。現在の状況で、全国の方々を対象とした集会を計画するのが難しい状況であることもあり、当面は現計画を継続しつつ新計画の実施主体の枠組みづくりを含めた作業を進めることとし、キックオフ集会は来年度に実施することにいたしました。なお、今年度末に意見調整のためのワークショップを計画しています。

編集後記

諸活動がコロナにかき乱されたまま2020年が終わろうとしています。人間の活動がいかに危ういバランスの上に成り立っているか思い知らされる一年でした。国際的には、地上の生きものすべてが健康でいられる世界を目指す「ワンヘルス」や、コロナ以前に戻るのではなく、よりよい社会を構築しようという「ビルドバックベター」などが提唱されています。農業部門では、環境への負の影響（農薬や人工肥料の多用・農業用地への土地利用改変など）を減らし、持続可能な農業に転換することが期待されています。田んぼ10年の皆さんが実施してこられたような活動が一層評価されるべき時代が来ているのだと思います。 安藤よしの



情報をお寄せください



田んぼ10年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。是非、皆様の活動の様子を、メーリングリストや田んぼだよりでご紹介ください。寄稿歓迎
また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」などというご希望もお寄せ下さい。



エコライフフェア 2020 に出展しています。「自然環境」バーチャルブースに見に来てください。 <http://ecolifefair.env.go.jp/>



田んぼ10年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
田んぼ10年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、
国連生物多様性の10年日本委員会の連携推進事業に認定されています。



連絡先/事務局
ラムサール・ネットワーク日本
info@ramnet-j.org
FAX:03-3834-6566

